



陽気だより

●ホームページからも「陽気だより」
最新号・バックナンバーをご覧いただけます
<http://yotokusha.co.jp/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

【「陽気」昭和45年12月号より】

病間私語

上原義彦

(昭和45年当時・本部長)

やまいを味わう

当年八十一歳の私は、今年ようやくに病み煩の意味を覚えていただき、なるほど納得させてもらいました。ことは、人生最高のしあわせと喜んで居るのです。うぬぼれではありませんが、この世に生まれてから長い年月の間、身上のさわりを知らずに過ごした私でしたので、人さまが「いつもお達者でけっこうです」と言われるままに、無病息災が人間の本来に生きる道だと信じていたのです。「人生無疾」これを私の人生行路のみちしるべとしてきたのです。

ところが今春の中ごろに、招かざる病の見舞いを受けて、思いもよらぬ「憩の家」の客となって二カ月を暮すこととなり、病の真理を肌じかに感じ、さらに人間せいじんへの前進をさせていただくこととなったのは、親神様の深い親心をお示しくださったことと思ひ、改めて、ただ聞きつ放して過ごしてきた迂闊さに気づいたのであります。およそ入信の手引きは身上のさわりでありますが、身上のさわりを受ける根元についての思案が足りないために、拝み祈祷

で病をたすけてもらうもののように早合点をしがちですが、病む当人よりも病の理をもって諭される親の心を汲むことがないので、病苦艱難の呵責と感、不足をつくるのではありますまいか。

みかぐらうたの十下り八のお歌に、「やまひはつらいものなれどもとをしりたるものはない」とお諭しになっていきますように、病のつらさ苦しさにとらわれて、病の元を探求する信心の道を忘れては、せつかくの思召も、わが子につらく当たる邪険な親の仕業のように、病、煩におそれおのいて闇の谷底へ転落するような運命をつくることとなるのであります。

私が老人病で「憩の家」の厄介になりましたのは、病氣療養という形を越えて、親神様が子どもの成人をと病を通じて心の治め方の勉強をさせるため、病の味を知らされたのでした。

人間せいじんの勉強

病と付き合うことは、だれしも忌み嫌うことではあります。世間でも、かわいい子ゆえに一人旅の苦労をさせるのが親の慈愛とかいいますし、愛の鞭を子どもに加える親心もあると聞きますが、道の信心でも病のもとを知り、病の味を知ってこそ、金剛不動の信念が固まるのであります。

人生迷路多しと、世渡りのむずかしさを嘆く人もありますが、本当に

八幡の藪のように、人生の行路は歩きづらう道程なのでしょう。神様のお話にも「一筋の道つとうたら神が待ちうけている」とありますが、一筋の道さへ往来すれば人生の迷路はないはずであります。

一つの道を行くには、一つの目標を見定めて一つの心で行くならば、それが陽気に一筋の道、神一条の道をたどることとなるのであります。私が信仰させていただいたのは親の腹の中からですから、正味八十一年の信心歴となりますが、日ごとの勉強を怠らぬつもりでも、親の目には抜かたり違ったりする危ない足取りもあって、そのため、そそうさせまいとする切実な親心から、身上をもってせいじんの勉強、心の治め方の勉強をさせてくださるのが、身上の手入れ、手引きという相であると思ひます。

「憩の家」では病人らしくない病人として、至極朗らかに暮らしていたのですが、日々お見舞いくださる方々が口をそろえ「どこが悪いのか」と尋ねられ、病氣は老人病ですが、勉強が「憩の家」の本命ですと、談笑したのでした。

「憩の家」の収穫

手軽に「身のうちかりもの」といいますが、借りものの理すなわち借りものとは親の真実であることがわかったら、みかぐらうた四下り八の、「やまひのすつきりねはぬけるころはだんぐいさみくる」とある

通り、人生陽気ぐらしを体験するのであります。「憩の家」にお見舞い下さった各位に「ふだんよくお勤めですから、神様からの慰労休暇、心ゆくまで憩って下さい」と、こういう慰めの言葉を毎日のように聞かされたのであります。

この信心はわかったようでも、わがりにくい生涯精進の道であることが、「憩の家」でのかげがえのない勉強の成果であり、よりいっそう信心の力強さと張り合いを感じたのでした。

教祖のお話として伝わるお言葉に「身上達者なれば錦を着たようなもの」と教え子に諭され、日々無病息災で暮す極楽世界の喜びを語り聞かされたことでもあります。

あさはかな人間思案から、人前だけ立派に体裁を飾ればそれでよいと、自己欺瞞に気づかないことは悲しむべき因縁の種子まきであります。

健康に暮らすためには、日々を陽気心で暮すのみであります。日々を陽気に暮すには身上恩借のありがたさをおろそかに思わず、大事に使わせていただくこと、いわば「日々ひのきしん」の生活を建前とすれば、病まず煩わず、成ってくる理を喜んで迎え、正味真実に生かされる生き方に、自他とともに満足できるものと信じます。

※陽気だよりは今号で最終号となります。長らくのご愛読ありがとうございました。今後は、「陽気」最新号のお知らせ(今号裏面)を配布予定です。